

「いつも悪いわね。アンタに揉まれながらするの、大好きなんだ♡」



「悪いだなんて、そんなコト言わないでよ、お姉ちゃん!」

実のところ、ボクは全く迷惑だなんて、思っちゃんない。

お願いされるのを心待ちにしてるんだ。



「はあぁ〜ッ！揉まれながらのオシッコ、気持ちいいよぉ〜♥」

「どう？これくらいの揉み方で大丈夫？」

つい最近、お姉ちゃんは、真っ裸になってボクにオッパイと金玉を揉ませながらオシッコをするのが、大好きになった。

エロイなあ。ボクが頼めば、セックスさせてくれるんだろうか？





その時は、ふいに訪れた。  
「ねえ。いつも私ばかり気持ちよくしてもらって  
悪いから、今日は私がアンタのして欲しいコト  
してあげよっか？」  
いきなりオマンコに入りたいなんて、ボクに言える  
筈もなく。  
「エッ？いいの!?じゃ、じゃあ、口で…」  
「うん、わかった♥」



お姉ちゃんのフェラチオはものすごく  
気持ち良くて、ボクはすぐにイッてしまった。

…ったく、あのコったら。

私が裸になってオシッコの手伝いまでさせて、  
それでようやく「フェラしてくれ」って、どんだけ奥手なのよ！  
あとは、どうしたら「セックスさせて」って言ってくれんのよ！  
私からセックスしてなんて、恥ずかしくて言えないし…。  
あ～！セックスしたいよオー!!



セックスしたいセックスしたい！あのコといっぱいセックスしたい！  
朝から晩までセックスしたい！あ～ッ！イクぅ～♥



美緒「はああく。やっぱり思った通り、アンタのオチンチン舐めながらオシッコ  
するの、気持ちいいわあ♥」



房雄「そ、そうなの？」

美緒「うん♥」(ホントは勃起してて、オシッコしたくらいんだけど・・・)

美緒「あ、あれ？おかしいな！オシッコ出ないみたい」

房雄「溜まってなかった？」

美緒「んー。そういうんじゃないくて・・・」

房雄「もしかして、オシッコじゃなくて、精子出したいんじゃない？」



美緒「エーッ？そう、なのかな？」

房雄「ボク、コシユコシユしてあげよっか？」

美緒「そんな！いくらなんでも、そこまでは頼めないわよ！」

房雄「前の時、フェラしてもらったから、おれだよ」

美緒「そう？じゃあ、頼める・・・かな？」

房雄「ウン♥」



房雄「コシュ。コシュ。コシュ。どう？お姉ちゃん気持ちいい？」  
美緒「止めてえ」

房雄「気持ち良くない？」

美緒「そうじゃなくて・・・オシッコ出すのは恥ずかしいけど、射精するの、恥ずかしいよお」



房雄「じゃあ、ボクが上手にお姉ちゃんを射精させられたら、

あとでまた、ボクのおチンチンしゃぶって。ね？」

美緒「うん、わかった・・・アッ。もう出るっ」

房雄「出して。精子出して♥」

美緒「アッ！出るッ!!!」

あのコの手コキで射精しちゃった！  
恥ずかしかったけど、でも・・・気持ち良かったあ♡  
あああああ！セックスしたい！セックスしたい！  
あのコと朝から晩まで毎日セックスしたいよお！  
あゝッ！イクぅ♡





美緒「アッ、アッアッ！出るウー！精子出るウー！！ねえ、出している？射精している!?」  
房雄「うん。いつでもいいよ。出して、お姉ちゃんの精子」

美緒「アッ！イク!!」  
房雄「ああ。出てるう」



美緒「イッちゃった。精子、いっぱい出ちゃったあ♥」

房雄「・・・」(うう)。ボクのオチンチン滅茶苦茶勃起して、お姉ちゃんの太腿に当たってるう。

またフェラしてって頼んだら、してくれるかな？でも、言うの恥ずかしいよぉ

「お姉ちゃん？お姉ちゃんなんでしょ？」  
「違います。私はあなたのお姉ちゃんじゃありません。だからセックスなんか、恥ずかしくもなんともないの！」  
（恥ずかしい気持ちを乗り越えるために変装したってことなのかな？とにかく、ようやくセックスしてくれたんだから、ここは乗っかっておくしかない！）「そうでした。あなたはボクのお姉ちゃんじゃないです。だから、思う存分、セックスしてください」  
「そ、そう。・・・じゃあ、続けるね」  
「はい♥」

「セックスって、こんなにも気持ちいいものだったのね。・・・あゝ。私、もうイキそう。もう出ちゃいそう」  
「出してもいいですよ。ボクの中でイッてください」  
「アッ、イクー房雄!!」  
「アッ！ボクも、イクうゝ!!」





「あの…今日はもうこれくらいにして、続きは明日ってことで、どうですか？」

「やーよ。だってアタシまだ、オマンコに入れてもらってないじゃん♥」

「ええ〜!？」(この人ってホントに、お姉ちゃんなんだよ…ね?)



変装したおかげで、ようやくセックスできた。  
思ってたより、ずっと気持ち良かったな。

あのコのアナル、すっこく気持ちよかった♡

あのコの意思を尊重して、オマンコの方は  
明日のお楽しみにしたけど・・・あぁー！  
早くオチンポ入れたい！あのコの  
生チンポ、マンコにハメたいよぉー！！





美緒「もう一回だけ聞けど、いいのね？ホントに出すよ？」



房雄「うん。出して。ボクにお姉ちゃんのオチンポシッコかけて♡」

美緒「出すよ……あッ、出る。……あー！どう？房雄、どんな感じ？」



房雄「くっくっ。くっく。くっくん。はああく。これ、スゴイ好きかも♡」



美緒「指、そのまま動かさないでね。もうそろそろ、オシッコ出そうだから」



房雄「うん。いつでもいいよ」

美緒（気を抜くとオシッコじゃなくて、精子が出ちゃいそう。アイマスクを

付ければセックス出来るようになったけど、素顔のままで房雄に

エッチなコトさせるのもやっぱり好きで、止められないのよね♡）



美緒「…アッ、出るぅー！おしっこ出りゅううう。気持ちいい。あゝ♥」



房雄（お姉ちゃんのオマンコが熱い。ボクの指をキュイキュイ締め付けてくる。

あー。オチンチン入りたい。お姉ちゃんのオチンチンをアナルに入れられる

のも好きだけど、指じゃなくてオチンチン入りたいよオー！）



夜中。房雄が、美緒の部屋のドアをノックした。

美緒「なァに？」(もしかしてセックスのおねだり？)

房雄「あのね、寝る前に牛乳を飲むと寝つきが良くなるってネットで見かけてやってみただけど、イマイチ効果がなくて。それで、もしかしたら、お姉ちゃんのオシッコを飲めば効果あるかもって思って」

美緒「いいわよ。房雄のためなら、いくらでもオシッコ出してあげる！」

房雄「ごくっ、ごくっ、ごくっ。ふう。おいしかったァ。なんだか効果ありそうかも。ありがとう、お姉ちゃん♥」

美緒「うん」(これで終わりなの？ガッカリ。こうなったらまた、変装するしかないわ！)



美緒「出すね、房雄！アナルの中で射精するね！」

房雄「ウン。きて、お姉ちゃん！」

美緒「イク！イクッ!!ア〜ッ♥」

（アレ？今、お姉ちゃんって言われた？もしかして、  
正体気付かれてるのかしら？それはないわよね。  
完璧に変装してるし！）





房雄「最近、お姉ちゃんってボクにかけないと、オシッコ出ないんだよね」

美緒「ごめんね。嫌だよね」

房雄「ううん、そうじゃなくて。外でオシッコする時って、どうしてるのかなあって」

美緒「あのね。房雄の顔写真を持ち歩いてて、写真に向かってオシッコしてるの。

だから、大丈夫だよ」

房雄「ああ、そうなんだ。イヤ、ちょっと気になったもんで」

美緒「心配してくれたんだね。ありがとね」

房雄「ボク好きだから。オシッコかけられるの♥」 美緒「房雄〜」(きゅーん♥)



美緒「ちょっとだけ、贅沢なコト言ってもいい？」  
房雄「言って言って。遠慮しないで♥」  
美緒「あのね。私ね、房雄のお尻の穴舐めながら、オシッコしたいの」  
房雄「そッ！それは…恥ずかしいよオ」  
美緒「そうよね。ごめんね」(しょぼん)  
房雄「…お姉ちゃん！ボクのお尻の穴、舐めてください！」  
美緒「房雄〜」(きゅーん♥)

房雄「お姉ちゃん、ボク、オチンチンしごかれたら、恥ずかしさが紛れるかも」  
美緒「いいよ」  
房雄「あっ、あ〜！お尻の穴舐められながらシゴかれるの、スゴイ気持ちいい」  
美緒「房雄のアナルの味、おいしい。あっ、もうオシッコ出そう。出るう〜」  
房雄「ボクも、精子出ちゃう！」  
美緒「房雄、いっしょに…ね？」 房雄「うん♥アッ、出る！」





房雄「オシッコ出やすいように、乳首いじってあげるね」  
美緒「アッ、ダメ！ソコ弱いからダメ！オシッコじゃない」



房雄「あっ！精子とオシッコいっぺんに出てる！」（ああー！お姉ちゃん、ボク、我慢できないよお！セックスしたいよお！）

美緒「イヤァ〜!ばかばかばかァ〜!」(もう!変身するしかないわ!!)

—性欲が羞恥心を上回った時、美緒はフタナリ仮面に変身する。

美緒「またキミのお姉さんに、セックスしてあげてって頼まれたから、来たのよ♥」  
房雄「フタナリ仮面さんとセックス出来て、ボク、嬉しいです!」

美緒「あゝッ! アナルの裏にオチンチン擦れて、気持ちいい! 房雄、私もう限界なの。もうイクね!」



房雄「うん! お姉ちゃんの精子、ボクの中にいっぱい注ぎ込んで!」

美緒「イクッ! 好きよ、房雄!」

房雄「ボクも、お姉ちゃん大好き!」



房雄「お姉ちゃんのパエラチオ、すっごい  
気持ちいい。…あー、もう出そうかも」  
美緒（射精しそうなんだね。いいよ。精子、  
出して。私もオシッコ我慢するの、  
もう限界だから）



房雄「あッ！イク!!あゝ、出ちゃったアゝ」  
美緒（きたア！精子、口の中に入ってきてるウゝ  
あゝ。やっぱり房雄の精子飲みながら  
オシッコするの、気持ちイイわゝ♥）





美緒「そんなゆっくり丁寧に手を動かされたら、オシッコじゃないのが出ちゃうよお！」  
房雄「精子、出ちゃう？いいよ」

美緒「ま、待って！変身するから」  
房雄「変身？」（フタナリ仮面になるの？まだ素のままじゃ、恥ずかしいんだ）



美緒「あッ！じゃなくて…」（私がフタナリ仮面なの、秘密だった！）  
房雄「出して。お姉ちゃんの射精、ボクに見せて」

美緒「駄目よ！恥ずかしいもん」

美緒「だめだめだめだめ！出ちゃうー！」

房雄「お姉ちゃん、可愛い♡」

美緒「可愛いとか、そんなの言っちゃダメ！精子出ちゃうから、ダメえ！」  
房雄「出して。精子出して」



美緒「あッ！イクう！イクうッ！！」

房雄「可愛いよ。お姉ちゃん、可愛い♡」

美緒「もう我慢できない！房雄とセックスする！フタナリ仮面に変身する！」



房雄「フタナリ仮面さん。お姉ちゃんに伝言、お願いできますか？」

美緒「なにかしら？」

房雄「フタナリ仮面さんとのセックス、気持ちいいですって」

美緒「えっ？ああ、うん。伝えておくわね」(そんな…！房雄ったら、私というものがありながらフタナリ仮面とのセックスに溺れてる!?フタナリ仮面は私だってバラしちゃおうかしら?)









美緒「また、房雄のおチンポが射精してるの見ながら、オシッコ

させてね♥」

房雄「うん。お姉ちゃんの手コキで、ボクのおチンチン射精させて」  
美緒「あゝ。いい握り心地。ウットリしちゃう♥」





美緒「…って思ったんだけど、房雄の射精見たら勃起してオシッコ  
出来なくなるから、今しちゃおっと♥」  
房雄「わあ。出てる出てる。お姉ちゃんの放尿は、何回見ても、全然  
見飽きないね」  
美緒「やっぱり勃起する前にして、正解だったみたい♥」



房雄「あゝ。お姉ちゃんの手コキ、気持ち良過ぎて…もう精子  
出ちゃいそう」



美緒「いいよ。房雄の射精、見せて♥」

房雄「…ッ、出るッ!」

美緒「出たア♥房雄のオチンポから精子出てるウ♥」

美緒（やっぱり先に出しという良かったア♥）









房雄「…出ないね。オシッコ、溜まってなかった？」



美緒「うーん。そろそろ出そうなんだけど…」

房雄「あッ!？」（これってオシッコじゃなくて精子…だよな）



美緒「あッ!？」（オシッコじゃなくて精子出ちゃった〜!!）



Mio Agui ... She can't say to her brother Fumio, "I want to have sex with you," but instead, "Help me to pee." When her greed exceeds shame, she transforms into "Futanari Mask".



阿久比美緒... 弟の房雄に「セックスしたい」と恥ずかしくて言えず、「オシッコするのを手伝って」と言ってしまう。性欲が羞恥心を上回った時、フタナリ仮面に変身する。